

# ギリシアの指揮者



雨宮夢彦

夜更けだった。東京のとある喫茶店アリアドネーでは、東京の大学出身である佐藤と鈴木が、ギリシアの文学について喋っていた。ホメーロスの「オデュッセイアー」についてだった。言うまでもなく、ホメーロスの「イーリアス」と「オデュッセイアー」は世界最古の叙事詩とされ、トロイア戦争のことが書かれてある。大神ゼウスと女神レートーの間に生れた絶世の美女ヘレネーが、トロイアの王子パリスと自分の夫を棄てて出奔したために生じたトロイア戦争でトロイアが陥没した十年後の或る日にこれらの物語は始まるが、ここでは「オデュッセイアー」について語られていた。オデュッセイアーは海神ポセイドオンの子ポリュペーモスを盲目にしたために、神の怒に触れ、帰国できずに女神カリュプソーにオーギュギーの島に引き留められていた。その間オデュッセイアーは、后ペーネロペイアーが残忍な求婚者達に迫られ、その財宝は彼等の荒らすがままにされていた。ギリシアの神々の会議で、オデュッセイアーは帰国を赦され、アテーナー女神の案に依るのだが、ゼウス神はヘルメース神をカリュプソーの下に遣わし、アテーナーはオデュッセイアーの故郷イタケーに赴く。オデュッセイアーはの息子テーレマコス、父の旧友メントールの姿を取って現れた女神アテーナーに導かれ、父の消息を求め、老王ネストールの元に赴く。テーレマコスは更にスパルタ王メネラーオスとヘレネーを訪れる。ペーネロペイアーの求婚者達はテーレマコスを襲撃するため、待ち伏せをする。ヘールメス神の命令でカリュプソーはオデュッセイアーに筏を作らせて海に出すが、オデュッセイアーはポセイダオンに見つけられ、海上で嵐のため難破する。彼は海の女神に助けられ、パイエーケス人の島に漂着し、その王の娘ナウシカアに助けられ、宮殿でもてなされる。その宴席で、トロイア陥落をデーモドコスが唄うのを聴き、オデュッセイアーは落涙する。そこで王はこれを認め、オデュッセイアーの素姓を尋ねる。彼は自らの素姓を証し、自分の十年間の漂流を語る。パイエーケス人はオデュッセイアーに莫大な贈り物を与え、オデュッセイアーを故郷に送る。彼はアテーナーの忠告に依り、老いた乞食の姿に変えられ、古くからの召使の豚飼の

小屋に着く。オデュッセイアーの息子テーレマコスは一ターナーからペーネロペイアーの求婚者の伏勢を告げられ、イタケーに帰り、豚飼の小屋に帰る。彼はアターナーにより元の姿に戻り、二人の親子は対面し、求婚者の殺戮の計画を立てる。親子は別々に宮殿に帰る。そして夜間、父子は武器を取り去る。オデュッセイアーの乳母は、彼の古傷により、足を洗う前に、彼と認める。ペーネロペイアーは、夫の愛用の弓を求婚者に見せ、十二の斧を貫き得た者の妻になろうと言うが、求婚者等は、誰一人としてこれを引き得る者はない。しかしオデュッセイアーは易々と弓を引き、斧の頭の孔を射抜いた。オデュッセイアーは、武装したテーレマコスと牛飼と豚飼を味方として、求婚者達を殺戮した。乳母はこのことをペーネロペイアーに伝え、彼女は遂に夫と認める。翌朝オデュッセイアーは、テーレマコス等と共に、老父であるラーエルテースの莊園に行き、求婚者の親族達の来襲に備える。しかし、襲つて来た彼等とオデュッセイアーは、アターナーにより和解させられた。

以上が「オデュッセイアー」の概略であるが、大学の西洋古典文学科出身であった佐藤と鈴木は、大学の近くにある喫茶店アリアドネーで、ブルー・マウンテンを飲みながら、この古典について話をし、二人共この古典を専攻したのだが、これには造詣が深かった。とりわけ、人間の運命という観点からこの作品を見てみるに、どこか希望に溢れた点がこの古典にはあり、人間性の奥深い本質が垣間見えるような気がし、名誉と野心と極限状況という人間の状態がこの古典にはひしひしと感ぜられ、はかない世間の成り行きと人間の力の限界とが、ありありと描出されているようで、ここにギリシア人の人間性を重んずる、希望に満ちた運命観が語られているかのようで、二人はこの古典に親しみと懐かしさを感じていた。

この著「オデュッセイアー」は現代の我等の世界で、広く読まれる価値があると彼等は言い合った。この著は或る点で現代人の心に何かを訴えかける力を持つ書ではないだろうか。

それはそうと、彼等はブルー・マウンテンを飲んでから、リキュールを喫茶店のマスターに注文した。ブランドーだった。店内にはジャズがかかっていたが、それはビル・エヴァンスの「ポートレイト・イン・ジャズ」だった。彼等は大学で、ジャズ鑑賞のサークルに所属していた。彼等はとりわけフリー・ジャズが好きで、ミュー

ジシヤンは、オーネット・コールマンとか、ドン・チェリーとか、チャーリー・ヘイデンとか、アルバート・アイラーなどが好きだった。彼等の奏でる楽器には、どこか風変りな何かがあり、それはコトバでは言い表すことのできない詩的なもので、言わば沈黙のうちの言語と言うか、この混沌とした世界の様相を見事に表現しているものがあり、世界と人間との一体感と言うか、世界との合一感と言ったものが存在しているかのように感ぜられた。

「ポートレイト・イン・ジャズ」は、ビル・エヴァンスの作品のなかでも、哲学的な哀調を帯びたものがあるアルバムで、この店ではこのアナログ盤が每晚と言っているほどかかっていた。

「ねえ。マスター、チャーリー・ヘイデンのをかけてくれない？」と鈴木が言った。「ああ、「クローズネス」ですね」とマスターが言った。マスターは、そのLPレコードをターン・テーブルの上に乗せた。ここでのウッド・ベース・ラインは素晴らしい。そこには何か独特のものがあつた。そこにも何か哲学的なものがあつた。言わば形而上学的なものがあつたのだ。

鈴木はかつて、森鷗外の短編小説「花子」を読んだことがあるが、そのなかに「おもちゃの形而上学」という一説が出てくる。子供がおもちゃを持って遊んで、しばらくするときつとそれを壊してみようとする。その物のうしろに何物かがあるかと思う。おもちゃが動くおもちゃだと、それを動かす衝動の元をたずねてみたくなるのである。子供はフィジックよりメタフィジックにゆくのである。理学より形而上学にゆくのである。「おもちゃの形而上学」には、そんなことが書かれてある。鈴木はこのベース・ラインに、それと類似したものを感じ取ったかのような気がした。ブランドーを二杯ロックで飲むと、彼等はまたコーヒーを注文した。グアテマラ産のコーヒーだ。この喫茶店には、世界各国のいろんなコーヒーがあつた。季節は冬だった。店内の花瓶にはポインセチアの花が飾られていた。彼等は、その花の美しさによって祝福されているかのようにだったが、今年の冬はどこか狂気の様相を帯びていた。それにしても、ポインセチアの花は幼い少女の微笑みのように美しい。その美しさは、恋人のいない彼等にとって、架空の可憐な恋人のようだった。彼等は花を愛でる心を決して忘れないだろう。二人は酔いに紛れ、今年の冬の深奥に紛れているかのようにだった。

佐藤と鈴木は二年前、このアリアドネー喫茶店で二十年振りに再会したのだった。それから度々この喫茶店に通った。彼等は大学のサークルの友人だった斎藤と山下と仲村にも連絡を取り、五人は最近ここで再会した。彼等は昔通り皆でギリシアやローマの古典文学について語り合い、旧交を温め合った。

彼等は喫茶店でカクテルを飲んでいた。ウイスキー・ベースのカクテルで、アイリッシュ・コーヒーといった。皆同じ銘柄のカクテルを飲んでいて、時刻は午後八時だった。皆はそれぞれいろんなパスタを食べ、食後にカクテルを飲んでいた。

「今日はローマ文学について話そう」と鈴木が持って来た参考書を広げて言った。

「まずルクレティウス、という詩人だけ」と彼は続け、更にこう言った。

「彼の詩は教訓詩と言われるんだ。紀元前一世紀の詩人だけだ。「自然について」という全六巻から成る詩が残っているけど、僕はこの詩をちょっと読んで、感銘を受けたんだ。勿論訳でだけだね」

「教訓詩というのは、ギリシアのヘーシオドスから始まって、エンペドクレースの「自然について」というのがあるけど、古代の昔は人間に関する教訓の多くを自然から取っていたと言われるね」と斎藤が言った。

「現代のように、「自然」、言うなればこの全世界の海や山や森林を破壊したのは現代の文明、言わばテクノロジーの発展だと思うけど」と佐藤が言った。

「ルクレティウスは、哲学者エピク羅斯とレウキッポスとデーモクリトスからインスピレーションを受けて書いたと思うんだけど、彼の詩は大傑作だと思うんだ、ヴェルギリウスには及ばないと思うけど」と斎藤が言った。

「昔は人間と自然とが合一していたのかも知れないね」と今度は山下が言った。

「大体、キケロという大詩人が居るよ」と佐藤が言った。

「古代ローマでは、キケロやカトウルスやヴェルギリウスなどが詩人として有名だね。でもその代表格はやっぱりヴェルギリウスだと思うんだ」と山下が言った。

「何でも、カトウルスが新恋人クローディアスと会ったのも紀元前一世紀頃で、ク

ローディアスはレズビアの名のもと人間の悲しみ、憎しみ、絶望を歌ったのも有名だけど」と佐藤が言った。

「「テーセウスとアリアドネー」という長詩もあるし」と鈴木が言った。

「彼等の詩は、自分の喜怒哀楽の情をそのまま直接抒情詩にしたのが大部分だと思うけど」と斎藤が言った。

「でもやっぱりその代表格はヴェルギリウスで、詩の伝統は彼に依って確立されたと言われると思うんだ」と鈴木が言った。

「ヴェルギリウスの代表作は「農耕詩」と言われるけど、農耕に関する詩はヘーシオドースの「仕事と日々」が端緒だね」と斎藤が言った。

「ヴェルギリウスは、戦乱の世の中に人々が土地を離れ、田園が荒廃されるのを憂いて、国民の愛国心を煽ろうとしたんだろう」と仲村が言った。

「古代ローマの当時は、ローマの理想、愛国心の礎となる詩を求めていたと言われるんだ、当時の文学には、古代ギリシアの文学の伝統が背後にあるんだけど」と佐藤も参考書を広げて言い、更に続けた。

「でも僕は思うんだ、古代ローマの文学には、ホメーロスのように、国民の営為を自由奔放に歌った詩はなくなってしまったよ。多分人文の哲学が発達し過ぎたためだと僕は思うんだけど」

「でも取り上げて言うべきは、やっぱりヴェルギウスの「アエネーイス」だよ」と鈴木が言った。

「彼の詩は故国イタリアの讚美で、古代ローマの文学の頂点の一つで、ルクレーティウスの詩と共に、教訓詩の古典として有名なんだ」と鈴木が続けた。

「そこには、ローマの始祖のアイネーアースのことが書いてあるんだ。トロイアの落城後、イタリアに来て、ラティウムの地に住み着くまでの彼を描き、この仕事に十年を要し、ギリシアと小アジアを旅したんだ。でも、「アイネーイス」は未完成作品で、十二巻から成り、自分は破棄を願ったけど、古代ローマの皇帝アウグストゥスの命で未完で発表されたんだ」と佐藤が言い、更に続けた。

「その詩はラテン叙事詩の極致とされ、言ってみれば英雄叙事詩だね。そこには悲恋と個人心理が綴られ、「オデュッセイアー」に倣って、主人公の放浪物語が綴られているんだ。僕はよく読んだわけじゃないけど、どこかヘレニズム風で、伝統と格式に満ちた作品と言われるんだ。ヴェルギリウスは偉大な詩人さ。僕はよく読ん

だ訳じゃないけど」

「僕はダンテの「神曲」も、ミルトンの「失樂園」も読んだよ」と仲村が言った。

「そこにはギリシアだけじゃなく、ローマの文人の影響も見られると思うよ、エンニウスとかルクレティウスとかだろうね」と鈴木が言った。

「とにかく、「アエネーイス」はローマの古典文学の、技巧を凝らした極致ではないだろうか」と鈴木が続けた。

「ラテン語はギリシア語よりも語彙に乏しいと言われるけど、微妙なニュアンスや韻律ではギリシア語に劣らないと思うよ」と佐藤が言った。

「あと、ホラーティウスという抒情詩人やルーキウスや、プロペルティウスなどの詩人が乱立したけど」と鈴木が言い更に続けた、

「ホラーティウスは、ギリシアのレスボス島の、詩人アルカイオスとサツフォーの詩風をラテン語に移そうとしたらしいね」と鈴木が言った。

アリアドネー喫茶店では、音楽はバド・パウエルの「ジャズ・ジャイアント」のLPレコードがかかっていた。皆それぞれ違ったりキュールを飲み、話に打ち興じていた。皆が飲んでいたりキュールは、ダイキリや、スクリユー・ドライヴァーや、ハイボールや、シャンペン・カクテルや、フランツィスカカーナーというドイツのビールや、アンカー・ブリュイニングというアメリカのビールなどだった。話しているとき彼等の口調はすっかりしていたが、次第にしどろもどろになってきた。

時刻は午前十二時になるうとしていた。店は二十四時間営業だった。

### 三

そこに宮下と高田が現れた。二人共、同大学の仏文科出身だった。宮下は紅一点である。彼女は美しい眼差しをした美人だった。バド・パウエルの「ジャズ・ジャイアント」が終ると、次にセロニアス・モンクの「ブリリアント・コーナーズ」に音楽が替った。やはりLPレコードだった。喫茶店アリアドネーでは、大抵ジャズのLPレコードがかかった。

時刻は午前一時だった。皆はリキュールを控え、エチオピアとかグアテマラとか

ブラジル産のコーヒーを飲んでいた。ホット・コーヒーだった。その朝、彼等は文学や哲学や思想について語り合った。皆一様に音楽が好きで、「ブリリアント・コーナーズ」の次にビートルズの初期のLPレコードがかかった。「アイ・ワナ・ホールド・ユア・ハンズ」とか、「シー・ラヴズ・ユー」がとりわけ懐かしかった。まず宮下が口を切った。

「私は、ビートルズの曲のなかでも、特に「エイト・デイズ・ア・ウィーク」が好きなのだ」

「僕は、「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」が好きだけどね」と鈴木が言った。

店内には、ビートルズの「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」のLPレコードがかかっていた。

「このアルバムには、犬の耳にしか聞えない音が入っているそうだね」と山下が言った。

「ねえ、フランス文学の話をしてない？」と宮下が言った。

「さっきまで古代ローマや古代ギリシアの文学について話したんだけど、今度はフランス文学の話か」と鈴木が言い、更に続けた、

「じゃあフランスの十七世紀の文学の話をするか」彼は言い、こう続けた。

「例えば、ラシーヌやコルネイユなどの詩人は、古代ギリシアの悲劇から題材を取ったけど、コルネイユの「ル・シッド」は、素晴らしい成功を収め、名誉とか恋、義理や人情の話が詰め込まれているらしいね」と彼は続け、更に、

「当時から、文学は人間の個性や世の中の風俗や風情が情熱を込めて書かれてあると思うんだけど、それもやっぱり古代ギリシアの文学や人間の発祥の時点の人間感情の問題かなあ」と鈴木は言った。

「コルネイユの劇の主人公たちは、情熱を悪いものと見做し、理性の力で感情を克服しなければならぬと考えていたようだけどね」と斎藤が言い、更に続けた、

「その点では、ラシーヌの方がより女性的で女性心理を掘り下げたのがラシーヌだそうだね」と彼は言った。

「コルネイユの創造した人物は、時代や国境を超えた普遍的な人間像を代表しているとよく言われるけど」と鈴木が言った。

「その点で、フランス十七世紀の悲劇は、古代ギリシアの悲劇とよく似ていると言



われるようだね」と斎藤がいった。

「でも、この時代の悲劇と喜劇は水中の酸素と水素のように混濁していたと、十九世紀のフランスの批評家の、誰だったかなあ、その人が言っているけど」と彼は続けた。

「僕もよく勉強したわけじゃないけど、十七世紀フランスの最大の劇作家はモリエールだと思うよ」と高田が言った。

「モリエールならよく読んだよ。彼の文章は軽妙洒脱だね」と山下が言った。

「その点では、私は「キャラクター」が好き」と宮下が言った。

「ポルトレ」という意、「肖像」、つまり自分で自分の外面を描いた形式が当時は流行ったけど」と彼女は続けた。

「それは、古代ギリシアのテオフラストスの「人さまざま」から題材を取ったものだと思うけど」と山下が言い、更に続けた、

「それは人間を客観的に見る最大の方法じゃないかな」

時刻は午前三時だった。喫茶店アリアドネーでは、シャンソンがかかっていた。バルバラの「晴れ着の男」とか、シャルル・アズナヴールの「帰り来ぬ青春」とかだった。

その日、彼等は一キユールやコーヒーを飲むと、それぞれの自宅に帰った。明日また会おうと言って。

#### 四

彼等七人は皆それぞれ仕事をしていたけど、経理とか、事務とか、書店の店員などの職に就いていた。だから、全員揃った日は稀である。そんな彼等は或る夜、全員アリアドネー喫茶店に集まった。そして彼等は、世界の文学について語り合った。季節は冬だったので、皆冬仕度をし、冬の東京の街は、クリスマスの賑やかさに満ち、街は人々でこった返していた。

その日、喫茶店では、音楽はビル・エヴァンスの「ワルツ・フォー・デビー」のLPレコードがかかり、「マイ・フリーリッシュ・ハート」の諧調は、そこでは不可

思議な余韻を醸し出し、それは東京の街の外れの、神秘的な雰囲気に含まれていた。「今夜も、世界の文学について話をしよう」と鈴木が言った。

「世界文学といっても、とりとめがないけど。でも私はドイツ文学が特に好きだわ」と宮下が言った。

「ドイツ文学には、世界の文学が凝縮されているような気が僕にはするんだ。何となくまとまっているような気がしてね」と仲村が言った。

「それはそうと、この前話したフランスの文学だけど、古代ギリシアの文学とどこが似ているのかしら」と宮下が言った。

「それはやっぱり、女性心理の複雑さとか、人間の根源的な衝動を描いているという点だと僕は思うけど」と山下が言った。

「ラ・ブリュイエール」というモラリストは、「コルネイユは「人間の状態はこうあるべきだ」とか、「ラシーヌはあるがままの人間を描いている」と言っているけど」と山下が言った。

「私は、フランスの文学では、モリエールが好き。「ル・ミザントロップ」とか、「タルチュフ」とか、「女房学校」が好き」と宮下が言った。

店内には、ミシエル・ペトルチアーノのLPレコードがかかっていた。彼のジャズピアノはとても明るい諧調を持ち、そのリズム感はとても優れている。

「古代ギリシアや古代ローマの文学は、十六世紀以来、フランスに移入されてきたそうだけど」と佐藤が言った。

「フランスの十七世紀の文学は、世界文学の歴史のなかでも、文学の最盛期とよく言われるわね」と宮下が言った。

「とにかく、この時期、文学には、人間の喜怒哀楽の情が、凄いい情熱を込めて書かれてあると思うんだ」と山下が言った。

「ところで、ドイツ文学だけど、私はやっぱりゲーテが最も偉大な文学者だと思うわ」と宮下が言った。

「世界文学という呼び名をつけたのもゲーテだしね」と佐藤が言った。

アリアドネー喫茶店は、新宿の場末にあった。そこは結構綺麗で、こじんまりとしていて、外装もよく、店内も綺麗だった。店の壁の隅に、モネの絵「睡蓮」がかかっていた。ブラウン色の光沢で輝いていた店の雰囲気は、どこかアンティークだった。音楽はまた、ビートルズの「サージエント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・ク

ラブ・バンド」LPレコードがかかった。

「私は、ドイツ文学というところ、「シュトルム・ウント・ドランク」、言うなれば、「嵐と衝動」ね。この運動が、如実に世界文学を語っていると思うけど」と宮下が言った。

「何でも、ジャン・ジャック・ルソーが、この運動の母体となったそうだね」と山下が言った。

「ルソーは、人間存在の根源としての自然への回帰と言うのかしら、それと個人の生まれながらの情感を書いた点では卓抜していると思うけど」と宮下が言い、更にこう続けた。

「ルソーの影響下から、当時の王朝の因習からの解放が現れ、フランス革命が起ったのもよく知られているわね」

「ところで、「シュトルム・ウント・ドランク」だけど、ヘルダーリン・ハーマン、ゲーテ、シラーなんかが有名だね」と鈴木が言った。

「とにかく、フランスで民族の精神の解放の運動が現実的だったのに対して、ドイツではそれがもつぱら内面的だったのと言えらると思うんだ」と高田が言った。

「「シュトルム・ウント・ドランク」は、当時の啓蒙思潮に対する反動で、現実的な運動に対する内的エネルギーの発現だと言われるようね」と宮下が言った。

「そうして、クロプシュトゥックや、ハーマンや、ヘルダー、更にはシラーやゲーテが出て来たようだね」と鈴木が言った。

「例えばヘルダーは、狭い規範を超えて、人間の本来に帰れ、と唱えたそうだね」と鈴木が続けた。

「そうして、かのゲーテが出て来るわけね」と宮下が言った。

「僕は、やっぱりゲーテが、西洋の文学史上最大の優れた作家だと思うけど」と鈴木が言った。

喫茶店の店内では、ジョン・コルトレーンの「バラード」のLPレコードがかかっていた。それが終わると、レスター・ヤングの「プレス・アンド・テディ」のLPレコードがかかった。そのA面とB面が全部終り、ハイボールやカクテルなどを飲むと、彼等はそれぞれ自宅に帰った。

その次の週の土曜日の午後七時のことだった。例の七人はまたアリアドネー喫茶店に集まった。今夜は皆でギリシア神話について話すことになっていた。喫茶店では、モーツァルトの「ジュピター」のLPレコードがかかっていた。カール・ベーム指揮のウィーン・フィルハーモニーのLPレコードだった。酔いに紛れ、彼等の会話は弾んでいた。

「ねえ、もしギリシア神話の神々が、西洋のクラシック音楽の指揮をしたとしたら、面白いだろうね」と佐藤がビールを飲みながら言った。

「ああ。それは面白いだろうなあ」と高田がバーボンをロックで飲みながら言った。「そうだなあ、例えば、このモーツァルトの「ジュピター」ね。もしこの曲を、指揮する神がこの世に現存したとしたら、大神ゼウスだろうね」と鈴木が言った。

「それは面白い話だなあ、これを指揮しているのはカール・ベームだけど、ゼウスが指揮したらこの曲は大音響で響くんじゃないだろうか？」と仲村がブランデーを飲みながら言った。

「私は、このベームのLPレコードが好きだけど、このアルバムを何回聴いたか分からないわ」と宮下が言った。

「もしゼウスが指揮したとしたら、楽団はベルリン・フィルだろうね」と鈴木が言った。

「私は、この「ジュピター」の他に、モーツァルトのピアノ・コンチェルト第二十三番が大好きなの」と宮下が言った。

「そのピアニストは多分プロメテウスだろうね」と佐藤が二杯目のビールを飲みながら言った。

「その楽団も、多分ベルリン・フィルだろう」と斎藤が言った。

「そのLPレコードのレーベルは、グラモフォンかな」と高田が言った。

「第二楽章なんか、とっても人間的な、情緒的な面があってね」と仲村が言った。

「指揮者は、アフロディーテーだと思うわ、とっても詩情に溢れていて」と宮下が

言った。

「女流女神指揮者かな」と仲村が言った。

「あと、ベートーヴェンの第五シンフォニーは、僕はアポロンが指揮するのいいと思うよ。楽団は、ニューヨーク・フィルハーモニックかな」と鈴木が言った。

「それはスゴイね」と仲村が言った。

「それに私は、ベートーヴェンのシンフォニー「田園」は、ヘーパイストスがいいと思うわ、何て言うのかしら、技巧的にとっても優れていて」と宮下が言った。

「それだったら僕も、ヘーパイストスはベルリオーズの「幻想交響曲」とか、ベルリオーズの一連の標題音楽がいいと思うよ、技巧的に優れていてね」と斎藤が言った。

「ストラヴィンスキーのバレエ音楽も、ヘーパイストスがいいと思うな。それにリストの一連の交響詩もね」と鈴木が言った。

「バッハの音楽は？」と宮下が言った。

「「マタイ受難曲」は、ヘレネーがいいと思うね、感情的にとっても豊かな感情を持っている」と斎藤が言った。

「「クリスマス・オラトリオ」は？」と宮下が言った。

「アフロディーテーだろうね」と仲村が言った。

「口短調ミサ曲は？」と宮下が言った。

「ゼウスかな。スゴイと思うよ」と鈴木が言った。

「バッハの他にも、僕はバロック時代のいろんな作曲家が好きなんだけど、指揮者や演奏家を挙げるとすれば、何ていうか、きりがなくて」と山下が言った。

「じゃあ、例えば、ブラームスは？」と鈴木が言った。

「ブラームスのシンフォニー第一番は、ポセイダオンがいいと思うわ、何となく」と宮下が言った。

「じゃあ、第四番は？」と仲村が言った。

「それはやっぱりアフロディーテーね、とっても抒情的で」と宮下が言った。

「じゃあ、例えば、シューベルトのシンフォニー「未完成」は？」と宮下が言った。

「太陽神アポロンかな」と鈴木が言った。

「そうだね、とっても精彩に富んでいてね」と佐藤が言った。

「じゃあ、例えば、ドヴォルザークの「新世界より」は？」と宮下が言った。

「それはプロメテウスだね」と山下が言った。

「チャイコフスキーの「悲愴」は？」と宮下が言った。

「アフロディーテーかな」と鈴木が言った。

「じゃあ、マーラーのシンフォニーは？」と宮下が言った。

「マーラーのシンフォニーでは、第九番が僕は好きだけど、これはエロースが  
いいと思うな」と仲村が言った。

「じゃあ、ブルックナーのシンフォニーは？」と宮下が言った。

「ブルックナーのシンフォニーは殆ど全部好きだけど、最高傑作は多分第八番と第九番だね、指揮者はハデースがいいと思うな。冥界の神ね。とっても深遠で、聴いていると孤高の境地に浸っているという感じがして、つい聴き込んだりうものね。楽団は、やっぱりベルリン・フィルかな」と鈴木が言った。

「じゃあ、ワーグナーは？」と宮下が言った。

「トリスタンとイゾルデ」は、アフロディーテーかな。「タンホイザー」は、アポローンかな。「ニュルンベルグのマイスタージンガー」は、多分アルテミスかな」と鈴木が言った。

「私はシベリウスやドビュッシーやラヴェルが好きだけど、例えばシベリウスのヴァイオリン・コンチェルトは？」と宮下が言った。

「ヴァイオリンはアテーナーだね。指揮はアフロディーテーかなあ」と酔いのせいかしどろもどろになって高田が言った。

「じゃあ、ショスタコーヴィチは？」と宮下が言った。

「シンフォニー第五番は、やっぱりプロメテウスだね」と鈴木が言い、更に続けた。

「僕はショスタコーヴィチが大好きなんだけど、ショスタコーヴィチの一連のシンフォニーは、アフロディーテーが指揮すれば面白いと思うよ」

「ところで、ドビュッシーの「海」は、ポセイダオンだね。それに、例えば、「ダフニスとクロエ」なんかは、アフロディーテーがいいと思うよ」と高田が言った。

「それにフランス音楽では、ラヴェルやフランクやフォーレは、多分アテーナーだろうね」と仲村が言った。

「ラヴェルの、「亡き王女のためのパヴァーヌ」なんかは、アフロディーテーだろう。それにもしリストを弾きこなせるピアニストがいたとしたら、アポローンかもね」と佐藤が言った。

「それに、シヨパンは、私は、やっぱりアフロディーテーがいいと思うわ」と宮下が言った。

皆は、全員大分リキュールを飲んでいて、酔っていた。時刻は午前五時だった。彼等が話している間中、喫茶店アリアドネーでは、モーツァルトのLPレコードがかかっていた。ピアノコンチェルトやヴァイオリンコンチェルトなどだった。

その一週間後の土曜日、彼等はまたアリアドネー喫茶店に集まった。もう文学や神話の話はしなかった。皆いろんなリキュールを飲み、いろんな煙草を吸った。皆大学時代を懐かしみ、あの時代はよかったな、と言いつつ合った。外では、冬の木枯しが吹いていた。その日の夜、皆大学時代の思い出話をした。男性は皆独身で、宮下も独身だった。宮下は美人だった。皆中年と行ってよかった。ひとりは寂しい、と皆口々に言い合った。男性達は、皆寂しいと言いつつ合った。宮下は、女性はもつと寂しいのよ、と言った。

その日は雑談で時を費やした。皆昔通りの感性を持っていた。これから、この世界の男女関係は、そして全世界の動向は、いったいどうなるのだろうか？ これからも、男女関係は錯綜しているに違いない。もう冬も終わりだった。その余韻はとても冷たかった。

終

参考文献

- ホメロス『オデュッセイア（上）（下）』松平千秋訳、岩波文庫、一九九四年  
渡辺一夫・鈴木力衛『増補フランス文学案内』岩波文庫、一九九〇年  
高津春繁・斎藤忍随『ギリシア・ローマ古典文学案内』岩波文庫、一九六三年  
手塚富雄・神品芳夫『増補ドイツ文学案内』岩波文庫、一九九三年